

クローズアップ・サンガ

百五十年ぶりの辞典

『浄土真宗辞典』（仮称）の編纂について



稲田英真

(いなだ えいしん)

はじめに

教学伝道研究センターの聖典編纂^{へんさん}部門は、一九八二（昭和五十七）年に策定された宗門の聖典編纂事業を引き継いでいます。これまでに刊行したものは、『原典版聖典』『原典版

聖典（七祖篇）』『註釈版聖典』『註釈版聖典（七祖篇）』と『現代語版聖典』（十種類）、そして『季刊せいてん』など多岐にわたり、その総発行部数は、合計で約百二十万部にものびります。これらの成果を承け、現在私たちは親鸞聖人七百五十回大遠忌法要に

向け、『浄土真宗聖典全書』（全六巻）の編纂を行っています。この『全書』の特長については、前号までの『宗報』の記事や、本号の「教学伝道研究所だより」に詳しく紹介されていますので、そちらをご覧ください。ととして、ここでは、その『全書』と並行して編纂が進められている『浄土真宗辞典』（仮称）についてご紹介したいと思います。後述しますが、宗門における辞典の編纂はおよそ百五十年ぶりとなります。

『註釈版聖典』の役割

すでに刊行されている『浄土真宗聖典』シリーズの中で、最も一般に広まり、各地の研修会などでも多く用いられているのは、『註釈版聖典』です。この『註釈版聖典』の特長は、何といってもお聖教のご文を拝読しやすいう、またご文の意味を正



参考資料の一部

確に理解できるように、さ
まざまに工夫されているこ
とです。漢文の聖教は書き
下され、漢字には読み仮名
が付され、句読点などが付
されています。そして、本
文に出る専門用語には本文
註や脚註が付けられ、頻出
する言葉については巻末註
として、さらには浄土真宗
の教義を理解する上で特に
重要な用語は補註として、
それぞれ解説されています。

このように『註釈版聖典』
は、お聖教に説かれる浄土
真宗のみ教えを、正確に拝
読していくのに最適な聖典
であると言えるでしょう。

『註釈版聖典』『註釈版聖典(七祖篇)』
『註釈版聖典(第二版)』それぞれの
巻末註・補註には、重複分を整理し

ても千三百語あまりの言葉が解説さ
れており、これはお聖教を拝読する
ための「真宗用語の解説集」と言っ
てもよいものでしょう。

八万六千語から五千語へ

さて、いま述べました『註釈版聖
典』については、各方面よりご好評
をいただいておりますが、その発刊
以来、お聖教の言葉のみならず、浄
土真宗に関する用語全般を総合的に
解説した辞典がほしいとの要望が、
多数寄せられていました。「浄土真
宗辞典」は、そのような求めに^{こた}え
て企画されたものです。

そこで、このたびの『辞典』に収
録する用語の選定にあたり、「註釈
版聖典」の巻末註・補註に収録され
ている言葉は、お聖教に頻出する言
葉であり、特に重要な用語ですから、
その千三百語がまずは基本となりま

す。そして、これに浄土真宗の教義・歴史・儀礼・旧跡などに関する用語を加えることにより、収録用語を大幅に拡大して、現在のところ約五千語を収録しようと考えています。

このような構想のもと、実際に『辞典』の編纂にあたって最初に検討したのは、新たにどのような言葉を収録して解説する必要があるかということでした。単純に計算して、約三千七百もの言葉を新たに追加することになります。追加の用語については、さまざまな観点から検討する必要がありますが、まず参考にしたのは、真宗・仏教関係の辞典でした。

現在、比較的容易に参照することができる辞典類は八十種類以上がありますが、その中でも広く普及し特に評価の高い十冊を選び、これらの辞典がどのような用語を収録してい

るかということをご参考にすることにしました。その十冊の辞典が収録する用語は合計で約五万四千語、これに現在までに刊行された『浄土真宗聖典』シリーズのすべての註釈類約三万二千語を合わせ、検討の際に参考とした用語はおよそ八万六千語にも上りました。

そして、この八万六千の用語を、

【書名】…経典や高僧方の著述

【寺名】…真宗ゆかりの寺院

【地名】…真宗ゆかりの地

【人名】…インド・中国・日本の高僧方など

【語釈】…右記以外の専門用語

というように、仮に五つのカテゴリーに分け、それぞれのカテゴリーにおいて、複数の辞典が解説している用語、お聖教に出る言葉、お聖教の文言には出ないけれども真宗関係の

解説書などの中でよく使用される重要な用語や概念などについて、たくさん資料を並べて、さまざまな観点から、収録する用語を検討いたしました。

ここでその詳細については略しますが、今回の『辞典』に収録する言葉は、【書名】約七百五十語、【寺名】約二百語、【地名】約百五十語、【人名】約九百語、【語釈】約三千語の計五千語を予定しています。この中には、従来の辞典には載っていない言葉も多数含まれています。

便利な『辞典』となるように

現在、約五千の収録予定の用語をもとに、それぞれ註釈文の試案を作成し、各分野の学識者と検討会議を開いて、収録する言葉とそれに対する註釈文の内容を固めていく作業のまったただ中です。その過程の中で、

『註釈版聖典』の巻末註や補註の方針を踏襲しながらも、最新の研究動向を踏まえて、必要に応じて多角的な視点からの解説や工夫を施しています。その一例をご紹介します。

せんじやくほんがん〔選択本願〕阿弥陀仏が因位の法蔵菩薩の時に、十方諸仏の国土の中から、その善妙なものを選び取り、粗悪なものを選び捨てて、衆生救済のためにたてた因位の願のことで、一往は四十八願のすべてを指す。しかしとくに第十八願において、一切衆生を平等に救済するため、自力の余行を選び捨てて、勝易具足の他力の称名一行を往生の行として選び取ったという、諸行と念仏との選択が中心になるので、再往は選択本願を第十八願の別名とする。↓補註17。

これは『註釈版聖典』の巻末註にある「選択本願」の項目ですが、ここには「選択本願」という言葉の意味が説明され、その最後に特に参照すべき項目として「↓補註17」と示し、補註の「17本願」の項目への参照を促しています。これは「選択本願」という言葉の意味を知る上で、ここに示された解説とともに、「本願」という項目に書かれている解説の内容も特に関連が深いため、併せて参照しておくことが重要であるということの意味します。この補註「本願」の項を参照することにより、「選択本願」という語の背景を知ることができるといことになるわけです。『註釈版聖典』の巻末註には、このような配慮がなされています。このたびの『辞典』にも「選択本願」の語は収録されますが、巻末註と同様に「↓○○」と、関連項目への参照を指示するのはもちろんのこと

と、それに加えて、解説文中に使用されている「阿弥陀仏」「法蔵菩薩」「因位」「十方諸仏」「衆生」「自力」「勝易具足」「他力」「称名一行」「諸行」「念仏」「第十八願」といった専門用語についても、それが『辞典』の項目として収録されている場合には、その語の傍らに「*」などの印を付けることによって、該当の解説を参照することができますようにしたいと考えています。それぞれ該当する解説も併せて参照することにより、「選択本願」の解説の内容もさらに深く学ぶことができるでしょう。

また、浄土真宗の教義において特に重要な用語や概念を解説する場合には、それがお聖教のどの箇所に出ているのかということも、解説文の中に盛り込むこと（具体的には「註釈版聖典」の該当頁数を表記）も予定しています。つまり、解説文から

その他の関連項目を参照することができ、さらに、それぞれの言葉に関連するお聖教の文言も参照できるような『辞典』を目指しています。

百五十年ぶりとなる『辞典』の編纂

記録を調べますと、宗門が刊行した辞典としては、江戸時代に編纂された『真宗法要』（親鸞聖人から蓮如上人までの和語の聖教を集めたもの。一七六五（明和二）年刊行）について、その本文に出る字句や引用文、故事などを解説した『校補真宗法要典拠』三十一巻（一八五六（安政三）年刊行）があります。宗門における辞典の編纂は、これ以来、約百五十年ぶりとなります。

『真宗法要』は、当時の文献研究の粋を尽くして編纂されたもので、現在においても極めて重要な聖典です。けれども近代以降、親鸞聖人真

蹟本や新たに発見された史料などをもとに、文献研究は格段に進んだと言えるでしょう。『註釈版聖典』は、現代における最新の研究成果をもとに編纂されています。

その『註釈版聖典』を拝読するにあたり、『浄土真宗辞典』が常に傍らに置かれ、浄土真宗のみ教えをより深く味わうための助けとなるよう、また、お聖教の本文に出る言葉のみならず、さまざまな場面で使用される浄土真宗に関する基本的な用語を網羅した汎用性の高い『辞典』となるよう、鋭意取り組んでいるところです。

（教学伝道研究センター研究員）